

迷ったとしよう。この何気ない選択が今後を大きく変えるかもしれない。この物語はとある少年のある時間軸における分岐点の話である。

桜ノ宮高校の美術部員、高宮綜馬は何ひとつ変わらない平凡な生活を送っていた。能力も特に優れたところのない彼は、美術部でも平均以下の成績だった。ある朝、いつものように美術室に行くと、謎の転校生、紺野鈴夏が窓際に立っていた。彼女は美術部に入ろうとするが、過去のトラウマが邪魔をし入部を辞退する。だがひょんなことから、綜馬にコンクール用の絵の描き方を教えることになる。数週間がたったある日、幼馴染である本条結衣に絵を見られることになった。彼女は今まで綜馬の絵を見てきているだけあり、絵の変化にすぐに気づく。その言葉に確かな成長を感じた綜馬は、コンクールへと向けてラストスパートをかける。だが、そんな綜馬の耳にある情報が入ってくる。それは鈴夏が交通事故にあったというものだった。

いることを知る。その夜、主人公の家に泊まることになった神出と共に家に帰る途中、尾行されていることに気づき、返り討ちにして尋問した。すると男はアトゥという言葉を出した。二人は家に帰り、その単語を検索するも何も情報を得られなかった。次の日、依頼人に現状報告するために喫茶店に向かう。そこで、宗教団体の名前とアトゥという言葉を使うと、明らかに反応したことに気付いた。それを追及すると、依頼人は二人を誰にも見られない場所に連れて行き、その宗教団体はアトゥという神を召喚するつもりだと言った。もちろん二人は信じなかった。すると依頼人はいきなり服を脱いだ。そこにいたのは魚人のような姿をした依頼人だった。驚く二人を横目に依頼内容の変更を言った。それは召喚の妨害だった。二人は渋々承諾し、教団本部に侵入した。そこで、今日の深夜0時に病院地下で召喚しその途中で妹が死ぬことを知る。二人は一度喫茶店に戻り、依頼人と共に作戦会議をし、直接行って止めることに決めた。二人は色々準備をし、病院に侵入した。召喚場所への入口は死体安置所で時間ギリギリに見つかった。召喚場所には十数人の男、祭壇、そして妹の姿があった。儀式を止めに行ったが、途中で周りの男に止められた。そして、妹は儀式のために自害してしまった。神出は、ふとこちらを見て、何かを投げ渡すと同時にこれを祭壇に向かって投げると言った。それに従って、投げると、ちょうど祭壇あたりに落ちた瞬間、爆発した。失意の中、主人公は祭壇に歩いていった。そこには妹の遺書が落ちていた。数日後、依頼人から報酬を受け取ったが、それは妹の遺書に従って、世界の貧しい人々に募金をした。二人は、外で軽く話した後、それぞれの道へ別れた。

優 秀

不可思議との遭遇

1年2組 高松 尚也

【あらすじ】 主人公の桂木一久は妹の見舞いの帰りに中学の親友だった神出と出会った。彼は今探偵業を営んでいて、仕事の手伝いを頼まれる。嫌々ながらも承諾した桂木は喫茶店で神出と共に依頼を聞いた。内容は失踪事件の調査だった。二人は聞き込みで宗教団体が関わって

※入賞小説全文は詫間キャンパス図書館HPに掲載予定

.....
〈詫間キャンパス 短歌〉

最優秀 触れる手と 優しい声が 嬉しくて 少し見えない 君の本心
 電子システム工学科 2年 好井 千華

優 秀 梅雨明けて 道路が飾る 水鏡 蘇らせる 子どもの記憶
 情報工学科 2年 竹嶋 翔矢

優 秀 北風が ほほに触れて 寒い朝 ぬくもり求め ペダル踏み込む
 1年3組 前山 胡桃

〈詫間キャンパス 俳句〉

最優秀 空蝉や はせる思いは 叶ったか
 電子システム工学科 2年 塩冶 卓也

優 秀 母の夢 手渡されたか 金木犀
 電子システム工学科 2年 間部 帆乃夏

優 秀 屋台にて 迷う幸せ 夏祭り
 1年3組 大西 美帆

〈詫間キャンパス 写真・イラスト〉

最優秀 しおかぜ 情報工学科2年 三宅 健太郎 (作品は今号表紙に掲載しています)

優 秀 夕日 (カラー作品)
電子情報通信工学専攻1年 瀧川 健太



優 秀 無題 (カラー作品)
通信ネットワーク工学科3年 横山 功典



教員によるエッセイ

『インターネットと本』

最近では参考文献となる論文の検索や自学自習のための解説資料の検索、果ては機械翻訳と、インターネットを通じた学習や文献調査が手軽に出来るようになりましたね。私自身、講義資料を作るときや論文を書く際は、まずインターネットで検索を掛け、それでも芳しい情報が得られない場合に限り、解説書や参考書といったものを眺めて情報を漁っています。

私が高専の学生だった頃は、しばらくの間自宅にインターネット環境が無かったこともあり、実験レポートやその他の課題が出されたときは、よく図書館に足を運び、関連の本を数冊探してその場で読んだものです。あるいは見つからなかった場合、駅前の書店に行き、関係する専門書を買って熟読することもありました。いまになって思い返すと、電子化や情報化というもののおかげで、非常に便利になったものだ改めて感心してしまいます。

最近、指導中のゼミ生と専門科目のよもやま話をしていたとき、「わからない部分についてネットで調べても、結論になる数式だけしか書かれていなく、その結論に至る過程が記されていないから理解に困る」なんて話が出てきました。こんな話を聞くと、自身で考える力を養うことも大事であるが、そのような地盤を与えることがもっと重要なのかとも思えてきました。この点で、高度な電子化や効率化にも短所があるのかと一考してしまいました。それと同時に、この話を聞いたとき、ふと私が大学

院で研究していた頃の指導教官の発言を思い出していました。「英文を和訳するときは、電子辞書ではなく紙の英和・和英辞典を使うといいよ。目的の表現や単語を探している中で他の単語や表現が目に入るし、気になった部分をメモっておくこともできる。もっと言えば、隣り合う単語も見ることができるから、探していたものプラスアルファで頭に入れておくことができる。」

実際、専門書や解説書を見ると、丁寧に導出過程を明記した本があるものです。また、途中で「え？」となる部分があった場合は、その本の前のページを見返すと、実は答えが掲載されていることもあります。対してインターネットで公開されているものは、どこか別の学校での講義資料か、有志が作成したもののデータ量の観点から最小限の情報のみを掲載したものとなっていることがほとんどです。

ものの見方とは不思議なもので、見る人によって何通りにも変わります。それは、専門書においても同じで。答えは一つであっても、その解決法、切り口は著者の哲学や主張によって変わってくるものです。一つの問題にかかわる本を数冊取り上げて読んでみれば、きっと、自分が知りたかった解決法や考え方にありつけるはずでしょう。

私が望んで就くことが出来たこの職業は常に勉強する必要があります。また本を読んで、寄り道しながら色々な話を頭に入れよう…。



電子システム工学科
杉本 大志